

Book·let

東京都神社庁 研修シリーズ：その二十一

明治の指導者に学ぶ

講師 渡辺利夫 先生

平成二十五年二月七日 神社庁大会議室

略歴

渡辺利夫 先生



拓殖大学総長・学長。1936年6月甲府市生まれ。慶應義塾大学卒業。同大学院修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て現職。外務省国際協力有識者會議議長。第17期日本學術會議会員。アジア政經学会理事長(元)。山梨総研理事長。JIC A国際協力功労賞。外務大臣表彰。正論大賞。『成長のアジア 停滞のアジア』(吉野作造賞)、『開発経済学』(大平正芳記念賞)、『西太平洋の時代』(アジア大平洋賞大賞)、『神経症の時代』(開高健賞正賞)、『新・脱亜論』(文春新書)、『国家覚醒』(海竜社)など。

目 次

第一部 明治の指導者に学ぶ

はじめに ······

陸奥宗光の日清戦争——指導者としての秀れた資質 ······

福澤諭吉の予見力——明治のオピニオンリーダー ······

日英同盟の締結と破棄 ······

劣化する日米同盟——友にこう嘆かせていいのか ······

第二部 渡辺先生と一問一答

日英同盟の陰に柴五郎の存在 ······

中国の本音を隠して相手を欺く とうかい 韓海戦略 ······

TPP参加YESによるそれぞれの思惑 ······

震災復興へ 共同体再生の道のり ······

第一部 明治の指導者に学ぶ

はじめに

皆様こんにちは。渡辺でございます。

事務局から「明治の指導者に学ぶ」というタイトルで何かお話をするようとにとのお申し越しをいただきました。レジュメを出す寸前まで、あれにしようか、これにしようかと考えておりましたが、どうにかレジュメでお渡ししているような話にしようかなと思つて、ここにやつて参りました。

歴史を学ぶというのは單なる懐古趣味ではなくて、結局、現代を学ぶということだらうと思います。歴史を学ぶということは、現代をよりよく生きるための指針を歴史の中に見出す、そういう知的営為なのだらうと思います。そういうことで明治の指導者から何かを我々が学ぶ、何のために学ぶかと言えば、現代の日本をよりよいものにするために、何かいい教訓的な示唆がそこから得られないかということであるうと思想します。

最初に、非常に気になつてゐることは、指導者たるもののは資質です。皆さんもどうしてこういつことになつてしまつたのかと思わされた三年半をお過ごしであつたに違ありません。ああいう何人かの首相の顔を思い浮かべても、どうにも指導者らしき風貌もしていなければ、資質もあるようには思えないわけです。一体、指導者の資質とはどういうものだろうかということを考えてみたいと思います。

さまざまな資質が必要なのだろうと思いますが、私はもつとも重要な条件は、國家の指導者ですから、国家の危機のことをいつも予見するということです。

現在、尖閣諸島をめぐつて中国が非常に挑発的な行動に出ていることはご承知のとおりですが、昨日の新聞では海自の艦船にレーザーの照射を行なつたというニュースまで載つておりました。まかり間違えば戦争になりかねない危険な挑発をもやつてゐるわけです。

そういうように危機は今、我々のそばにやつてきてゐるわけです。危機を予見する、そして危機がやつてきたと思えば、それに迅速に対応していく能力があるか否かが問われるのです。平時につつても来るべき危機というものを常に想像して、その危機が現実のものになつた場合には誤りを絶対に残さないような知的鍛磨を恒常的にや

つている人間、これが指導者の最も重要な資質ではないかと思います。

陸奥宗光の日清戦争——指導者としての秀れた資質

日本の開国・維新から初の本格的な対外戦争である日清戦争、そこから十年たつて日露戦争が起ります。開国・維新を経て日清、日露戦役に至るまでの東アジアに置かれた日本の位置は、まことに緊迫に充ち満ちたものでした。

そこで、国際環境に対する冷嘲な判断にわずかな狂いがあれば、日本という国、日本人という民族が滅亡してしまいかねないという恐ろしいばかりの緊迫、緊張を強いられた時代であつたと思います。

この時期に、我々が名前を知っている指導者、誰を挙げても結構ですが、位をきわめた人であれば、いずれも今、言つたような資質において優れた人であつたはずです。そういう資質において欠けるものがあれば、これは歴史から名前が消えていつたに違いないと思います。

したがつて誰を取り上げてもいいと言えぱいいのですが、私が若いときから暗記するほどに読み込んだ一人の政治家がおります。これは陸奥宗光という人物です。こ

の人は日本初の総力戦であつた日清戦争に至るまでの開戦外交、そしてそれが終わつてからの戦後外交をただ一人で孤独に戦つた外務大臣、これが陸奥宗光です。私はこの政治家を非常に尊敬しております。

外務省の中に立像が一つあります。外務省に行かれることがおありかもしませんが、入りますと右手に守衛さんがおります。そこをまっすぐ右手に進んでいくと柵にぶつかります。その柵をまたまっすぐ前方に進んで、ぶつかつたら左に折れてまつすぐいきますと、かなり大きな実物大もしくはそれより少し大きなブロンズの立像があります。前には小さな池があります。酸性雨に当たつたらしく青い筋が何条にも走っています。前には小さな池があります。その何条もの青い筋が陸奥という人物のすごいみを浮かび上がらせていています。その何条もの青い筋が陸奥といふ人物のすごいみを浮かび上がらせているような感じがして、一層鮮やかな効果を見せているように思います。

外務省で唯一の銅像というわけですから、歴代の外務大臣の中でも最も深い尊敬、敬愛を受けていた人物と言えましょう。この人の人生の中でシンボリックなことを一つ言つておきます。

明治二十七年の日清戦争で日本は清国に勝利いたします。当時は帝国主義の時代ですから、勝利した側が敗北した者から領土を奪つたり、賠償金を奪つたり、あ

りとあらゆることをやりました。これは善悪の問題や倫理の問題ではなく、当時の戦争とはそういうものであつたということです。弱肉強食という言葉があるように、弱者には安住の地がなかつた時代ですから、すべての帝国主義列強がそういう行動に出たわけです。

下関に春帆樓というふぐ料理で有名な料理屋があります。戦争が終わつた後、その二階で日清講和会議が開かれます。その会議には元勲伊藤博文、陸奥宗光外務大臣が全権代表で出ているわけです。その対面には清国側の全権代表、李鴻章、そして李經方——この方は余りご存じないかと思いますが、当時の清國の中日公使です。この四人の周りを両国の外務官僚が取り巻いて長い議論をして、最終的に講和条約が承認されたということになるわけです。

そして台湾、台灣と福建省の間にある小さな島嶼部を日本に割譲する、旅順や大連のある遼東半島を日本が受け取る。そしてさらに多額の賠償金を受け取るということを決めて、そこで談判が終わつたわけです。日本の世論は大いに沸いたのは当然のことです。

さて、この下関講和条約が成立した日は、もう一度申し上げますと明治二十八

年四月十七日です。当時は明治大帝の天皇陛下の批准が必要でしたが、その批准を終えた日が三日後の明治二十八年四月二十日です。ところが何と恐ろしき時代でしょうか、その三日後、四月二十三日には三国干渉がやってくるわけです。ロシアがドイツとフランスを巻き込んで、遼東半島を直ちに清国に返せと、遼東半島の清国還付という強圧的な交渉にやってくるわけです。

日清戦争の大本営は広島にありました。今の広島市の宇品うじなという港から出陣していました。陛下もそちらの陣営の中にいたわけです。元勲もほとんどそちらに行つておりました。東京の外務省はがら空きだったところにロシア公使がドイツとフランスの公使を連れて三国干渉——「だめだ、返せ」と言うわけです。本当に驚愕したことでしょう。

ロシアという国はある意味では大変かわいそうな国で、冬になると全部氷で閉ざされてしまい、外洋に出ていく港がなくなってしまうのです。そういうことで何とか冬になつても凍らない港が欲しいというわけで南下政策を繰り返すわけです。ロシアの南下はロシア人のDNAの中に組み込まれている、そういうふうに表現する人もいるくはないのです。ロシア人にとって遼東半島における旅順、大連などというのは、

ロシアがよだれがこぼれるほど欲しい港であつたはずです。

それが日清戦争の勝利によつて清国から日本の手に渡つたということになれば、これは許せない。日本も日清戦争は総力戦でありますから、国力、軍事力のすべてをこれに投入しているわけです。当時、清国は日本よりかなりレベルの高い、ドイツから購入した艦船軍を保有していました。艦船の保有量で軍事力が決まる時代ですから、日本は劣勢だったわけです。その劣勢だった日本が日清戦争によつて戦力を蕩尽してしまつてゐるさなかに三国干渉がやつてくるわけですから、どうにもこうにもしようがないというわけです。

少し話が飛んでしまいましたが、三国干渉がやつてきたのは四月二十三日です。元勲伊藤博文が松方正義を引き連れて兵庫県の舞子に行きます。なぜ舞子に行つたかといふと、この時点では陸奥は末期の肺結核にかかりました。当時は癒すすべのない温泉地で休んでいたりほかに療法がないような病でした。そこへ行つて、「陸奥さん、どうしましようか」という話を聞くわけです。

もちろん陸奥は絶対反対、そういう屈辱的な外交をするわけにはいかないと書いていましたが「陸奥さん、国の将来を思え」という伊藤の説とどのぐらいの議論をし

たのでしょうか。随分長い議論をしていたようですが、最終的に陸奥は「よし、仕方なし、三国干渉を受託すべし」と判断したわけです。

私の家に、ある錦絵があります。恐らく明治神宮に本物が置いてあるのでしょうか。見ていないのですが、いざれ確認して見ていただければと思いますが、春帆樓の二階で日清談判をやっている、その向こうの下関海峡を三つか四つの帆船が南方のほうに下つていく姿があります。

史書によりますと、これが日本に残っている最後の艦船だったようです。これはどこへ行こうとしていたかというと、澎湖島を攻めに最後の船が出でいたところです。つまり、それが事実であるならば、三国干渉がやつてきたとき、日本海軍の国内の軍事力はゼロであつたということです。これをもし拒否したなら、当然、ロシアはドイツ、フランスを巻き込んだ連合艦隊を組んで日本にやつてくる、途端に日本は滅亡というロジックであつたようです。いたし方なし、ということです。

そしてこの三国干渉を飲んだのが、五月十日で、同日に陛下の批准もなされました。

もう一度申し上げますと、下関条約が成立したのが一八八八年四月十七日、陛下

による批准が二十日、三国干渉開始が二十三日、この受諾を決定したのが五月十日ということです。三国干渉から始まり、この受諾に至るまでに要した期間はわずか十八日間という迅速さです。そのくらいの速さで決定をしています。

当時は電話もなければ、もちろんメールはあるわけはありませんし、鉄道はあっても部分的でしかない。その辺の記録はよくわかりませんけれども、恐らくは船で行つたのでしょう。ともかく十八日間でピンポイントの判断をした。「もしそうせざれば」という恐怖があつたに違ひないだろうと思います。

レジュメの最初の章の末尾に『蹇蹇録』けんけんろくと書いてあります。これは岩波文庫からかなり大きな活字体で出ていますから、現代でも我々は読むことができます。「蹇」というのは、足が滞つて体の自由がきかないという感じでしょうか。これが二つですから、もうどうしようもない、末期の肺結核で身動きできない中で、日清戦争の開戦期から三国干涉の屈辱を飲まされるまでの全外交記録を陸奥宗光は一人で執筆し、執筆が終わると同時に死んでいくわけです。

その陸奥の記した『蹇蹇録』の最後に次のように書かれています。

「畢竟我にありてはその進むを得べき地に進み、その止まらざるを得ざる所に止

まるたるものなり。余は當時何人を以てこの局に当らしむるもまた、決して他策な
かりしを信ぜんと欲す」

進むときには進むけれども、どうしてもとどまらなければならぬときは、私ははつきりとどまりますよ、と言つてゐるわけです。「進むのは簡単だけれど退却するには非常に強い決断がいる」とよく言われますが、戦争はまさにそうだろうと思ひます。これだけの屈辱を受けながら、「なにくそ」と思うものを彼は戦い続ける形であらわさなかつた。むしろ盤石の態勢を整えて、次の戦さに備えるといふほうに注ぎ込んだことだらうと思ひます。

「余は當時何人を以てこの局に当らしむるもまた、決して他策なかりしを信ぜんと欲す」——すぐれた者であるならば、この場にいるならば私と同じく考えたはずだという自負をこゝう言つてゐるわけです。

日本の近現代史を勉強している多くの人たちには陸奥の『蹇蹇録』を、三国干涉を受諾したある種のエクスキューズだ、自己弁護の人だと。そこまではあからさまに言わないまでも、そのような主旨の解説をする本が、残念ながら少なくありません。まことに残念なことだと思つております。

陸奥のこの本を読んでみれば、陸奥が弱音を吐いたといふところはどこにもないのです。卑下をするところもない、悲嘆に暮れるところもない。国際政治のありようというものをただただ怜悧に見つめています。確かに敗戦の書ではあるけれども、読み終えたときの私の持つ読後感、感情として残っているものは、陸奥の氣概と剛毅です。

外務大臣の弁明の書だ、などとしか解説できない研究者は、恐らくは陸奥の文章から立ち上つてくる香氣をかぎ取ることのできない凡庸なのだろうと私は思つております。何という解釈だと、そういう解釈を読むと今でも腹が立ちます。

福澤諭吉の予見力——明治のオピニオンリーダー

次に、今度はオピニオンリーダーの一人を取り上げて見たいと思います。明治のオピニオンリーダーといえば、誰しも福澤諭吉を思い起すに違ひないと思います。先ほども言いましたように開国・維新から日清、日露戦争を経て日本は世界の一等国として認められるだけの地位を築くわけです。けれども、そこに至るまでの間、国際環境に対する寸分の狂いを持った判断も許されなかつた時代だと思います。

この寸分の狂いもない判断、人間ですからときに間違えることもあるわけだけれども、今、思い起こしてみても、あの情報もろくにない時代にありながら、どうしてここまで冷徹に国際環境を見据えた男がいたことに、驚かされるほどです。その代表者が僕は福澤諭吉なのだろうと思います。

後ほど少し紹介いたしますが、福澤諭吉には「脱亜論」という有名な論文といいますか、社説があります。福澤諭吉は私財を投げ打つて自分のお金で「時事新報」という新聞社を立ち上げ、毎号その社説を書いていましたが、その中に「脱亜論」があります。要するに支那、朝鮮、今の中国・韓国・北朝鮮とはつき合うのをやめようという激しい、激高の論説です。

これについては未だに、今だからこそと言つてもいいのかもしませんけれども、多くの人々は、日本人が持つアジア蔑視の思想の元凶はここにある、という書き方をしている人が少なくありません。私はこれにも驚かされております。先ほどの陸奥に対するコメント、福澤諭吉に対するコメントはどこが間違えているのかと言えば、現代という時点に立つて往時、百年以上も前のオピニオンや思想や行動を批判するというやり方です。今の価値観で過去を断罪する、こういうことが許されるな

ら、こんなに楽な商売はないでしょう。

しかし、皆さんご承知のようにそういう楽な商売を今はたくさんやっています。学者のみならず政治家の行動、中国、韓国に対し全く同じことをやっているわけです。そういう意味で私が今、批判している物言いをしている人たちは、現代もなお同じ構図だと理解する必要があると思っています。

歴史学を勉強するというのはこういうことではないかと思います。当時の日本が置かれた国際的な条件の中で、日本と日本人がどのように行動したときに成功し、どう行動したときに失敗したのか、そのことをひたすら怜憫に分析し、その中からどういう行動をとったらしいかという教訓的示唆を学ぶのでなければ、歴史を学んだことにならないのだろうと思います。

現在の日本は中国に対してどういう戦略を立てたらいいのか、朝鮮半島にどういう戦略を立てたらいいのがという」とを考えるときに、有名な国際政治学の大家が書いた「国際関係論」というテキストの中、あるいは「国際経済論」というテキストなど、国際と名のつくテキストは山ほどあります。そういうものの中に何か真実が隠されているかのように我々は錯覚しがちです。学問をそう思ってくれることは、勉

強する人間にとつてはうれしくなくはないのですが、眞実はそういうところにあると決して私は思いません。

眞実は、日本と日本人が現実に歩んできた道の中に、どういう条件のときに日本は成功し、あるいは失敗したか、山のような歴史の蓄積の中から教訓的示唆をくみ取つていく作業が歴史学なのだろうと私は思つていますが、多くのジャーナリストや政治家や思想家はそうは考えていない。

現代、我々が生きている今、ある規範のようなものがある。その規範とのずれをもつて過去を批判するというあり方は、まことにばかげたことなのではないかと思います。現在、そういう問題がたくさんあるのではないでしょうか。従軍慰安婦の問題、歴史認識の問題、韓国併合の問題、南京虐殺の問題など山ほどあります。

こういったものを現代の時点に立つて批判的に見ると同時に贖罪の気持ちを抱く。個人の志向としてはよくわかりますが、民族や国家のレベルに立つて数十年も前の時代のことを振り返って、それが倫理的、道徳的な悪であつて、それに現代の日本の行動が縛られるというのであれば、何の価値もないことだと言わざるを得ません。

一国と一国との歴史、国際関係の中ではそういうものを洗い流すための条約とい

うものがあります。韓国との問題では日韓基本条約が一九六五年に結ばれて、これで日韓の懸案事項は最終的にすべてが決着したということになつてゐるわけです。決着したと、両国の最高責任者が署名した文書というものをチャラにして、あの時代のものを蒸し返し、蒸し返された日本人がそれに對して謝罪をしたり反省をしたりしてしまう。そうであれば二国関係が、国際関係がうまくいくはずはないわけです。

日本と中国の間でも一九七二年に日中共同声明が出され、その七年後に日中平和友好条約が出され、そこで両国の問題は解決し、国交が新たに樹立されるという経緯をたどつて今日に來てゐるわけです。それ以前のことと言ひ出したらきりはありません。

すれつからしのことを言つてゐるのかと言われるかもしだれませんけれども、歴史といふのはそういうものではないかと私は思います。反省するものではない。現代と未来をよりよく生きるために素材をそこに発見するという営為、と定義づけなければどうにもならないと思います。

人間関係も同じことが言えます。反省し出すときりがない。イギリスは七つの海

を支配し、日の沈むことのない大国を築いた国です。世界のありとあらゆるところに武力侵攻していった英國が、果たしてその結果を植民地に対して贖罪したという事実を私は寡聞にして知りません。

アメリカがいかに残虐な行動をインディアンに対してとり、日本人に対してとり、フイリピン人に対してとつてきたかということも歴史の真実ではあるけれども、アメリカが公式のドキュメントでそのことを謝罪し、アメリカ人がそのことで心を苦しめられていることはありません。それはある条約という形、平和条約で一旦切れます。一旦切つて新しい関係をやろうということになつていていますが、日本はそれをやつていません。

韓国や中国の立場からすれば、そのように日本を追い込むことが外交的優位のみならず、道義的にも優位に立て得ることをよく知っているから日本を責めるわけです。日本人が常にそのように考えているので、そこがウイークポイントだと知つて突いてくるのであって、彼らの行動は決して異常ではない。異常なのは日本人の感覚のほうにありはしまいかというのが、私の考え方です。

さて、話が変なほうに行つてしましました。福澤のアジア論はアジア蔑視論の元

凶であるかのように言われます。社説ですからそれほど長いものではなく、A4で六枚ぐらいに收まりますので、いざれ機会があれば福澤の「脱亜論」を見ていただきたいと思います。そこには次のように書いてあります。

「今日の謀^{はかりごと}を為すに」——この場合は外交でしょう。外交という謀^なをなすに、「我國は隣國の開明を待て共に亜細亞^{アシア}を興すの猶予あるべからず」——韓国のことと言つてゐるわけですが、朝鮮の開国を待つて、一緒にアジアを興していこう。本当は私はそうしたいけれども今はその余裕はない。「寧ろ、その伍を脱^{むし}して」むしろ逆にそういうことをせずに「西洋の文明国と進退を共にし、支那、朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釀に及ばず」

ヨーロッパの列強が朝鮮に対しやつてることと同じことを我々もやるべきだ、その自主独立を促して一緒にアジアを興す猶予はとてもありませんよ、まさに西洋人が朝鮮に接するふうに従つて我々も朝鮮を処遇すべきだと。

最後に「悪友を親しむ者は共に悪名を免かるべからず。我れは心に於いて亜細亞^{アシア}東方の悪友を謝絶するものなり」——何と激しい言葉遣いでしようか。「悪友と」でしょ。 「悪友と親しむ者は共に悪名を免かるべからず。我れは心において亜細亞東

方の悪友を謝絶するものなり」——もつつき合わない。ここまで突き放して言つているのです。だからこそ、これをアジア蔑視の思想の元凶だと多くの人々はここを読んで言つてゐるわけです。

しかし、福澤が言つてゐることは全く違います。私はこれがリアリズムそのものだと思います。むしろ日本が生存していくために不可避のリアリズム、私は生存リアリズムと呼びたいほどだ、とエッセーに書いたことがあります。

当時、福澤が直面していた朝鮮はどういう国であつたかというと、李朝の末期です。戦争と内乱の連続であつたと言つてもおかしくはないほど朝鮮半島が大変に乱れていた時期です。当時、朝鮮は独立国ではなく、清国と君臣の関係にありました。つまり、清国は君で朝鮮はその臣下であつた。

内乱や戦争が起りますと、双方がすぐに清国に通報をして、派兵を要請します。すると大量の軍隊が清国からやってきてその乱を治めるということが年中のようになります。どうでしようか。日本よりも軍事力がはるかに大きな清国が隣の朝鮮半島まで来てやりたい放題やつている状況を福澤は見るに見かねているということです。

福澤の書いた文章を見ると、我々が知っている一万円札の穏やかな顔をした福澤とは随分違います。この言葉にもあらわれているように激語を使う人です。当時、朝鮮のそういう現状に耐えられない開化派の若手の官僚が相当いました。その開化派官僚を年中応援して、開化派の影響力の強い学生が日本に留学したいなど、一番先に三田の山上にある福澤の私邸に寄宿させて慶應義塾に通わせました。あるいは戸山の軍学校に彼らを送りました。

これも事実ですが、武器弾薬を買って、密輸品を半島に渡すことまでしています。開化派を助けて、何とか独立自主の国にさせたいと心から考えてやっていたわけです。

福澤の指示の下、その開化派がクーデターを起こして、ある晩六人の守旧派の官僚をパーティに誘い込んで惨殺します。ところがその後に清国兵がやってきてその乱を治めてしまい、開化派官僚を全滅させて日本人を放逐するという出来事が起きました。福澤はここで激しい怒りと朝鮮に対する絶望を抱きます。その報を聞いた福澤が書いた文章がこの「脱亜論」です。

朝鮮を近代化させ、ともにアジアを興す友邦たろう。これを理想にしていた福

澤にここまで書かしめた朝鮮あるいは清国とは何者であったか、清国と朝鮮と縁を切りたい、そしてヨーロッパの文物に学んで近代化を歩むよりほかに道はないのだと福澤が思いを定めて書いた文章が「脱亜論」であり、その後日本はそうした方向に動いていったことは言うまでもありません。

そう考えると、明治中期に至る日本の近代化の基点に福澤諭吉というオピニオンリーダーがいたということは、きわめて重要な意味を持つたのではないか。私は常にそう思つております。

日英同盟の締結と破棄

先ほどの日清戦争に戻りますけれども、この戦争を通じて日本が何を得ようとしたかということとは、その条約文の一番最初に書かれるはずです。その条約の一部分をどこかに書き込んできたのですが、どこかに行つてしましました。私の記憶によれば、「朝鮮は自主独立の邦なり」——朝鮮は自主独立の国なりということです。

つまり、清国の臣下ではなく自主独立の国だ、清国と韓国との君臣の関係は絶たれたということが第一条に書かれます。日清戦争は朝鮮半島の清国からの独立を狙

つた戦争であるという主旨のことが書かれています。福澤はまさにそのためには努力をした人物だと解釈することもできるわけです。

もう一つ。福澤について申し上げておきたいことがあります。日清戦争に勝利しました。しかし、次に日本を主敵として待ちかまえていたもう一つの大國があらわれてきます。これが世界最大の陸軍国家ロシアです。ロシアは今の中東東北部、吉林省、遼寧省、黒竜江省、当時、満州と言われた地域に巨大な軍勢を張り、満州を攻め落としてしまった。鴨緑江をひとつ越えれば朝鮮半島ですから、朝鮮半島にやつてきたらもう対馬海峡を越えると日本です。

ということであれば、一戦を交えなければ明治帝国は完成しないと多くの日本の指導者が考えたとしても、不思議はないことです。ただ、この世界最大の陸軍大国に極東の幼弱な小猿日本——小さな猿と言われていました——勝てるわけはない。そこで日本が目をつけたのがイギリスです。イギリスもまた日本に目をつけました。そして同盟を結びます。これが日英同盟です。

少なくとも日本の文献から見て、このことの必要性に一番早く気づいたのが福澤です。いかに予見力の高い指導者であったかということがわかるような気がします。

少しわかりにくいかと思いますので、もう少し解説いたします。

今、言つたように日清戦争に勝つて、朝鮮を自主独立の邦とする——やがて韓国は日韓併合という形になつて日本の領土になりますけれども、それはともかくとして中国の東北部にロシアが巨大な軍勢を率いている。それが鴨緑江を越えて朝鮮にやつてくることはそう遠いことではない。もしそうなつたら対馬海峡を越えて日本だ。日本人がロシアの属国、保護国、植民地のいずれかになつてしまふ可能性に恐怖したのは当然のことです。さりとて日本独自の力でロシアと抗する力はない。そこでイギリスに目をつけました。

実はイギリスもロシアの南下政策に苦しめられていました。ご承知かと思いますが、イギリスは香港島を領有し、香港の対面にある九龍半島を九十九年間租借をします。ここで清国は眠つてゐる大国だと思っていたけれども、本当は眠つてもいない、大した力のない国だということがわかり、世界中のありとあらゆる列強が中国の沿海部の有力な都市に入つていき、そこを租界にしてしまう。その中心が上海でありました。

上海からさらに長江、揚子江をずっと上つていった流域にイギリスは巨大な権益を

築いていきました。実はこれらの権益がロシアの南下政策によつて潰えてしまうのではないかという恐怖をイギリスも持つていたわけです。小村寿太郎という外務大臣の大活躍を通じて、日英が同盟を結ぶことになりました。同盟とは利害を共有するが故にできるものです。

先ほど来、言つていますように当時は航空機の時代ではなく艦船の時代ですから、艦船の排水量によつて軍事力が計られるわけです。日英の艦船の排水量の合計は、その他すべての国々の排水量の合計よりも多く、絶対的優位性が保てるわけです。だからこそイギリスも日本と手を組んだということです。

いろいろな要因がありますけれども、恐らくは日英同盟こそが日露戦争において日本が国の総力をここに注ぎ込む条件を与えた最大の国際条件であつたと考えていひだらうと思います。この点は『坂の上の雲』(司馬遼太郎著)の七巻、八巻あたりにいかにも司馬らしく、實に鮮やかに書かれております。大河ドラマはどうもその辺が司馬の原作ほど描ききつてゐるようには思えませんが、テレビドラマだからしようがないのでしょう。

次の文章を見ていただきたいと思います。日清戦争が終わった翌年、日露戦争に

至る十年近くも前に福澤は既にこういふことを言つていました。

「我輩素より文明立國の自利主義」——エゴイズムです——「を知らざるに非ず。唯、これを知るが故に英人の必ず我に応ぜんことを信ずるものなり」——つまり、日英同盟を持ちかければ必ず乗つてくると言つてゐるわけです。「其の次第を語らんに、抑も英人が自国の利益を衛るために第一の目的とする所のものは、露国の南進を防ぎ彼をして海浜に頭角を現すこと勿らしむるの一事にして、多年来、英國の外交政略と云へば殆んど此の一事の外に見る所なしと称するも過言に非ず」——この辺もいかにも福澤らしい断定的な言い方ですが、實に鮮やかな判断と言えます。

こういうすぐれたオピニオンリーダーが世の中を動かすといふことの意味は、やはりこういう確かな予見力ではないかと私は思います。

今、言つたような経緯で日英同盟は結ばれたわけですが、次に、この問題を現代のテーマに置き換えてみたいと思います。

日本は三年半前に民主党が政権登場したあたりから日米中正三角形論などといふことを、大人が聞いているとおかしいような話をいいおじさんがまともに議論して

いました。常識的に考えてそういうばかりなことがあるわけはない。日米中正三角形とは、アメリカと中国は日本から等距離にあるという見方です。

日米関係は同盟関係ですから、日本が急迫の事態に陥れば米軍は日本を防衛する義務を負っています。その義務にこたえるものとして日本はあれだけ大量の在日米軍基地を貸与する、そこでバランスが成り立っています。

日中関係はそういう同盟関係でも何でもなく、普通の一国間関係です。普通のというよりは、先ほど言つた歴史認識問題、尖閣の領土問題、その他ありとあらゆる厄介な問題を抱え込んだ複雑な二国間関係であると言つべきでしょう。その日本と日米が等距離にある、現実にはそうではないのにそういうことを言うのは、つまりは正三角形にすべきだと彼らは考へてゐるということでしょう。米国との距離を遠くし、中国との距離を近くする、確かに三年半続いた民主党政権のありようを見ていると、そのように動いたとしか思えません。

私の感想を一言で言えば、何を思い悩んでいるのかということです。衰えつつあるとはいゝ日本は世界最大の覇権国家、アメリカと同盟関係にあるのではないのではどうか。自國の安全を一番効率的に保障するものは最強の覇権国家との同盟関係であ

る。このことは、それほど大きな声で言わなくても、小学生でもわかる理屈ではないでしょうか。

パプア＝ニューギニアという国があります。立派な国ですけれども、日本はパプア＝ニューギニアと軍事同盟を結んだところで、日本の安全保障には何の役にも立ちません。もつとも弱い国と結んでどうして日本がこの厳しい国際環境の中で生き延びていくことができるのか。

最強の国と結んだときに安全が効率的に保たれるのです。そういう状況の中で非核三原則だ、専守防衛だ、というのんびりしたことが言つていられたのではないか、というのが私の考えです。既にある日米同盟を大事にしようということ以外にほかに何か策があるかのように言うのは、よほど変な人だと見えるのですが、この意見は間違いなのでしょうか。

世界最強国との関係を信頼深く保つことによって、その国の安全が最も効果的に保障されます。逆にその関係が絶たれたときいかなる悲劇に陥るかということは、つい先だっての歴史に例があるのでないか。その例を我々はじっくり見ておく必要がある。それが日英同盟です。

日露戦争開戦の二年前に日英同盟が結ばれます。日英同盟の成立によって日本は日露戦争に勝利することができた、確かにそのとおりです。日露戦争勝利後、実は大正十年十二月にワシントン会議が開かれ、ここで日英同盟は廃棄されますが、その間、明治末年の十年と大正のほぼ全域が日本の青春時代、最も幸せな時代であつたと思います。

日本人として生まれてよかつた、日本という国を祖国に持つたことがこれほど幸せなのか、多くの日本人がそういう感覚を共有できた希有な時代がここにありました。この時代は日英同盟に守られていました。この間に日本の国土、つまり領土、領海は一日たりとも侵されることはないかたわけです。芸術面で見ても、芸能面で見ても、一番勃興した時期ではないかと思います。

大正デモクラシーということを聞いたことがおありでしょう。これは世界で最初のことですが、二十五歳以上の男子であれば、納税額のいかんにかかわらず一票の投票権を持つという選挙法がこの時代に成立しています。

私は戦争が終わったのが小学校一年生だったので、戦後の教育では民主主義はG H Qが持ち込んでくれたもので、それをみんなありがたく思え、と思い込まされてい

ましたが、それはうそです。そういうことを言つた時点のアメリカは人種差別のまつただ中にあつたはずです。それよりもずっと早く大正期に日本は普通選挙を生んでいるのです。それから三井、住友、安田、三菱という世界的な財閥が生まれた時代もあるわけです。

先日、岡崎久彦先生のある本を読んでおりましたらこういうことが書いてあり、さすが岡崎先生はおもしろいことを言つたと思いました。我々が知つてゐる子どもの歌、童謡、少しシニアの方であればみんな知つてゐる「うさぎ追いしあの山」、「月の砂漠」、「しょ、しょ、証城寺」、「歌を忘れたカナリアは」とか、そのほとんどがこの時代に生まれました。いかにこの時代の日本が豊かで安定的で、人々が穏やかであつたかとの証明に他ならないと言つてゐる。さすが岡崎先生だ、僕にはできないと思いました。

白樺派の小説などもみんなこの時代に生まれたものです。文化的に見ても、学術的な面で見ても、芸能面から見ても、産業面から見ても、何より大正デモクラシーという政治制度の面から見ても、この時代は日本の青春時代であつたのだろうと思います。誇りに思つていい時代だらうと思います。最強の覇權國家と同盟を結ぶことの

誇り、完璧に守られた安全保障の中で一国というものが、社会全体が大きく発揚される時代を見ることができるような気がするわけです。

ところがまことに残念なことに、この同盟が破棄されてしまうという出来事が起ります。これは大正十二年のことですが、以来、日本は坂の上から真っ逆さまに第二次大戦敗北という亡国皮一枚の状態まで落ち込んでいきます。一体、何が日英同盟という日本にとつてきわめて大切な資産を失わしめたのか、ここにポイントがあるうかと思います。

あまりここを深掘りすることはできませんが、ごく簡単に申し上げておきますと、その後、第一次世界大戦が起ります。この第一次世界大戦の中心にあつたものはイギリスの対独戦です。あるいはドイツの対英戦だともいいでしょう、もちろんイギリス側に連合軍としてほとんどの欧洲諸国、日米も加わって最終的にはドイツが負けるわけですが、史上初の世界的総力戦が第一次世界大戦です。

敗戦国ドイツが廃墟になつたことは当然ですが、戦勝国のイギリスも廃墟になつてしまつた無惨な戦争であつたと思います。したがつて戦勝国はどこだつたかよくわからないのです。ただ、よく見据えてみると、実質的な勝利者は日米両国だつたの

です。日本はもちろん日英同盟を結んでいましたから、イギリスが戦争をしているわけですから参戦することになります。米国は最後の最後まで逡巡しておりましたけれども、最後にはイギリスをサポートする側になつて、それが要因となつてドイツが敗北を期することになります。

ところが日米は参戦はしたけれども戦局外にあり、日米が戦場になることはなかつたわけです。むしろその戦場に向けて大量の戦略物質を生産し、輸出することによつて巨大な財をなしたのが日米であつたということです。どこが戦勝国であつたかわからぬような第一次世界大戦ですが、終わつてみれば世界の霸権国家として日本とアメリカ二カ国が残つたということが歴然たる事実だらうと思います。

さて、そこで日米のいわば宿命の対立が始まるになります。「霸権国とは他国の霸権を認めない国のことである」と私の同僚が言つていましたが、なかなかおもしろい定義と思います。アメリカの対日敵視、その投影としての日本の対米敵視というものがだんだんとエスカレートしていつたわけです。

アメリカはその時代の全外交努力を日本に向けてまいります。そしていろいろ戦略を考えたようです。なぜ日本という小さな国がこういう強い一等国になることがで

きたのか、考え抜いたわけです。その原因は日英同盟にあつたのだといふことが、その結論です。日英の絆を切つてしまえば、分断させれば日本をやつづけることなどそ
う難しいことではないと決意したようです。

そして第一次世界大戦の戦後調整であるところのパリ講和会議でアメリカは拳に出
ようとしたが、それはうまくいかなかつたため、大正十年、ワシントンで会議
を開き、そこでアメリカはこう言うわけです。「もう日英同盟など古いよ」と。

大体、大戦争が終わると平和主義的なセンチメントが世の中を覆う……厭戦気分
といいますか、さらにそれが平和主義的な協調主義的な対応を生むのが通例です。
この時代もそうでした。アメリカは日本に対して、もう戦争など古いよ、日英が軍
事同盟を結ぶという時代ではない、もっと多くの国を含んだ協調主義でいこうではな
いか、日英だけではなく、ここにアメリカとフランスも加えて四国同盟でやつたらど
うか、というようなことを言い出すわけです。

この要求にイギリスと日本はもちろん抵抗します。それは日露戦争に勝利した
日英同盟である、第一次世界大戦に勝利したのも、日英同盟であるがゆえに日本の
参戦が可能になつたのだ、こういう有効な条約を捨てるわけにはいかないと両国は突

っぱねるわけです。だが、最後にはイギリスが折れます。イギリスには第一次世界大戦、物心両面におけるアメリカの大量の支援があつて初めてこの戦争に勝利できたという負い目もあつて、最後には折れてしまうわけです。

「わかつた、では四国同盟でいこう」と言つたわけです。日本は置いてきぼりを食つてしましました。かつて深い信頼に結ばれていた友邦から裏切られたという感覚を持つことになります。以来、日本は孤独に独力で軍事力を育成し、独力で中国に進出し、独力で自分の権益を守り、拡大していかざるを得なかつた。日本の悲運は日英同盟廃棄によつて余儀なくされたものと言えます。

日英同盟廃棄以降の日本は音を立てるようになつて落としていきます。年表を少し見てみました。大正十年に日英同盟が廃棄されます。十二年には関東大震災が起ります。これは別に同盟廃棄と関係ありませんけれども、不吉な将来を予兆するような感じの出来事です。大正十三年には米国で排日移民法が成立します。

昭和二年には山東出兵、昭和三年には張作霖爆殺事件、昭和五年にはロンドン軍縮会議、昭和六年には満州事変、昭和七年には満州国建国、五一五事件、昭和八年には国際連盟脱退、昭和十一年には一二六事件、昭和十二年には支那事変、

昭和十四年には第二次世界大戦勃発、昭和十五年には日独軍事同盟成立、昭和十六年には真珠湾攻撃、二十年には日本の降伏、まさに坂の上から落ちていくような時代に入つていきました。

利害を共有する国との厚い信頼を持つた同盟関係が有効であれば盤石の安全保障を手にすることができる一方、これを手放した途端に奈落の底に落ちていくような歴史的な先例を我々は持つてゐる、ということを言つてゐるわけです。

次の章では、四年ほど前に亡くなられた先生で、獨協大学におられた中村粲あきら先生が『大東亜戦争への道』という本をお書きになり、その一説の中に日英同盟について振り返った文章があります。

「我が国はその後（日英同盟廃棄後）」——その後、というのは日英同盟廃棄後という意味で、○は私がつけ加えた文章です。「我が国はその後、極東情勢の混乱に単独で対処する他なかつた、最も同盟の必要な時期にそれがなかつたのだ。日本は自ら望まずして、孤立へと追ひやられたのである。以後大東亜戦争に至る迄まで我が国が歩んだ孤立と苦難の二十年間を思ふ時、日英同盟消滅せざりしかば、の感を深くせざるを得ない」

私が長々と下手な言葉でしゃべるよりも、中村先生のわずかこの五行の中に真実がきっちと語られているように思います。先ほどの簡単なクロノロジー（年代記）を振り返るだけでも、日英同盟廃棄、「最も必要な時期にそれがなかつたのだ」という感じはわかります。

そこで皆さん、ひょっとしていたずら書きをして、中村粲先生の「日英同盟」を「日米同盟」と言いかえてみたらどうでしょうか。恐らく後世の歴史家によつて、「ああ、あのときが日本の巨大な悲劇の始まりの日であつたなあ」と思わせられるようなことになりますしまいか、と私は思うのです。

こういうことが言えないでしようか。日英同盟の廃棄はいかにも慙愧さんきにたえない歴史的事実であったと思います。中村先生と同様な感覚を持つてゐるのです。しかし、心のどこか一部に、そうは言つてもしようがなかつたのだな、という気分があります。何しろ相手は巨大な覇權國家アメリカです。アメリカの容喙ようかい、介入によつて余儀なくされたものだというエクスキューズは可能です。アメリカの圧力にイギリスが屈し、それゆえ日英も同盟を破棄せざる得なかつた、これはしようがなかつたのではないか、という気持ちがあります。

劣化する日米同盟——友にこう嘆かせていいのか

ところが現在の日米同盟の危機というのは、誰か第三国が容喙しているのでしょうか。もちろん中国は日米同盟反対でしようけれども、かといって日米同盟をどうかするために戦争を仕掛けてきているなどということはない。日米同盟の危機というのは、当事国日本の不作為といいますか、日本のまるで信じられないような行動様式によつて起つていることは事実です。

日英同盟の廃棄はアメリカという第三国の介入によつて余儀なくされたものです。が、日米同盟の危機は当事国日本の不作為によつて起つているということが何とも残念なことだ、こういふばかばかしいことがあつていいものか、というのが私の感想です。

言うまでもなく鳩山さんの時代に、「少なくとも国外、少なくとも県外」という何の思想も戦略もない、ただその場の取り繕いをやつてしまつたことが沖縄の世論を一挙に反転させて動かないものにさせてしまい、普天間基地の辺野古沖への移転が不可能になりました。全く日本の不作為によつて起つたことです。まさに残念だ、

と言ふしかないわけです。

今、尖閣で起こっていることの本質はなかなか難しいように思いますけれども、恐らくは日米同盟が鳩山さん以来、三年半にわたって揺らいでいる、安倍さんになつてもとに戻そうとする努力はし続けるでしょうけれども、もとの関係に戻らない可能性もあるわけです。沖縄世論のことを考えるとそう簡単ではありません。

そうなると日米の絆がどれくらい強いものであるかを今、中国は一生懸命、尖閣という島で試しているのではないでしょうか。日本のほうも不安になつて前の政権の外務大臣がすぐにクリントン国務長官のところへ行って、「尖閣は日米同盟の防衛の対象地域です」、「そうですよ」と言われて、ほつとしたような顔をして帰つてくる。そういうことの繰り返しです。

中国はその行動をじつと見ているのだろうと思います。そして、もう一回押し戻してやろうか、接続水域から今度は領海に入つてやろうか、今度は領空も侵犯してやろうか、今度はレーザーを照射してみようかと、いろいろなトライアルをやつているのだと思うのです。そのトライアルの過程でアメリカがどう反応するか、アメリカの本音はどうやら「日本が本格的に自ら守る意思のないような島は放つておけ」という対

心になるのではないか、そういう間合いをずっとはかっているのだろうと私は思います。

尖閣は話し合いで半年や一年で解決できる問題とは私は考えておりません。中国は、もうと長く恒常に圧力をかけ続け、そして日本がどう出るのか、アメリカはどう出るのかということを見計らっている。我々はここは十年、十五年ぐらいの単位で恒常に圧力をかけられてくる、という自覚を持つて事に対処しなければならないだろうと思います。

日本の世論は、特に中国論は非常に分裂的なテーマですから、押していくといろいろな虫が出てくるのです。実際問題、もう何匹も出てきているのではないか。「尖閣は係争中の島です」と言って中国から帰つてくる元総理大臣がいます。

尖閣は日本固有の領土であつて、ここには領土問題は存在しないというのが政府の見方であつて、私もそう信じています。その政府解釈のど真ん中にいた本人がリタイア後、中国に行つて、「係争中だ」と言って帰つてくるわけです。与党のもう一方のトップが中国に出ていて、棚上げ論に近いことを言ってくる。村山さんという昔の社会党の首相をやつた人が行つて、「村山談話は有効だ」と言って帰つてくる。加藤紘一さんが行く……虫がたくさん出てくるわけです。

恒常的な圧力をかければ日本はこれに耐えられなくなるだろうと、そういうことを中国は今、誘っているわけです。そういう意味では中国の権力者は徹底的に合理的な判断をする集団だと私は思います。自国の権益、国益を一インでも二インでも前方に進めるためにありとあらゆることをやっていく。そしてきわどいことまで恒常的にやる、そういう意味では真に国益を守らんとする権力者集団だろうと思います。したがつて私は中国のやりようを理不尽だとか理屈に合わないとか、条理に合わないという論評はするなど常に思っています。中国の政治集団のほうがよほど真っ当な集団だと考えるべきだろうと思います。真っ当でないのは我が国のほうではないかと考える、とても外交戦に勝てるとは思われません。

二〇一二年九月に尖閣諸島に中国漁船がやってきて、国境を警備する海上保安庁の巡視船に二度にわたって体当たりをした出来事を皆さんには鮮やかに覚えておられるだろうと思います。今でもユーチューブで見ることができますが、ああいう出来事が起こると日本の五大紙は翌日一斉に社説を出します。その社説に何と書いてあるかというと、「中国のやり方は理不尽だ」と書いてあります。そういうことを書いているようでは初めから敗北だ、と私は思いました。

いかに理不尽と感じようとも、相手には相手の理があるはずです。相手は相手の理に基づいて行動しているのであって、でたらめな行動をしているわけではないので、「理不尽だ」という社説のほうがよほど理不尽だと言い返したことが一度だけあります。それきりその新聞社からは原稿の依頼がなくなりましたが、どうしてこれほどやわなのだろうと思ひます。

「これはおかしいね」と夫婦でそういう話をしたとき、我妻が「人間関係だつてそうよ」と言うので、おまえうまいことを言うな、と思わず合点したことがあります。いくら気に入らない相手でも、「あいつは理不尽だ」と言つた途端にその人間関係は壊れるわけです。相手には相手の理があるはずだと考えて、その人間との間合いをとりながら多層的な人間関係を我々は築いていく、それが人生というものだろうと思ひます。

国際関係も同じだと思います。新聞も商品ですから、国民が怒つていそうであれば怒つていてるよう書かなければ新聞は売れませんから、そう書くのでしようけれども、「理不尽だ」では話にならないと私は思つてゐるわけです。

アメリカにとつて世界の数ある同盟の中でも日米同盟は最も大事なものだ、アメリ

力はそう考えているのだから日本もそういうアメリカの思いにこたえて行動してほしい、ということを発信し続けている重要な人物がいます。それがジョセフ・ナイという人です。この人はハーバード大学の国際政治科の先生で、世界的に有名な方です。もう一人はリチャード・アーミテージという人です。ブッシュ政権の時代の国務長官がたしかコリン・パウエルという黒人の将軍でした。この副長官をやつた人です。ナイ、アーミテージは知日派の代表格で、二〇〇一年、二〇〇七年、そして去年の夏に「アーミテージ・ナイ報告」を出しています。その中でポイントになっているのは、集団的自衛権行使しなさい、行使を容認しなさい、そうしなければ日米同盟の将来は危ないでしょうということを言っています。

改めて言うまでもないと思いますけれども、集団的自衛権というものはすべての国が持っている自然権です。これは国連憲章にも書いてありますし、日米安保条約の前文にも書いてあります。しかし、日本の政府、内閣の法制局の判断は違います。「集団的自衛権を日本は保有しています、しかし、憲法の制約上、これを使ふことはできません」と言っています。持つているけれども使うことができないという理屈があるわけはない。法理的には破綻している理屈です。誰が考へてもわかる破綻

です。しかし、この内閣法制局の見解を現在の政権に至るまでずっと踏襲しているわけです。

「集団的自衛権行使を容認する」と言うと、新聞はすぐに、「日米は両軍一緒になつて海外で戦争をしまくるのか」というようなことを言うのです。それも集団的自衛権と言えば言えなくはないですけれども、そういうことを日本がするわけがないです。

今、一番気になつてゐることはどうことです。例えばアメリカの艦船と日本の艦船があつたとして、この二隻が公海で共同軍事演習をしていたとします。第三国がアメリカの艦船をミサイル攻撃して撃沈したと考えてください。当然、共同行動をしていた日本の艦船はこの第三国に反撃を加えるはずです。そうしないとこの関係は保つことができないでしょう。

しかし、今の政府解釈ではアメリカの艦船が撃沈されても逃げてしまわなければならぬのです。これが集団的自衛権の行使に相当するからです。そういうばかなことが、と皆さんはお考えでしょうけれども、そういうばかなことが今まで起こらなかつたからいい、もし起つたら、明日から日米同盟は廃棄です。一年前後の事

前承認が必要だということになつていて、一年間は大丈夫でしょうけれども、翌日からワークしなくなることは間違いないでしょう。

もう一つ例を挙げてみます。日本列島がここにあり、ここがアメリカです。第三国からミサイルが飛び出してアメリカの西海岸に着岸します。第三国がどこの国か大体想像つくと思いますが、必ず日本列島の上を通ります。日本列島の上を通過すれば、当然、弾道計算をして、九九・何パーセントの確率でサンフランシスコ郊外のどこに落ちるということが計算できただとします。当然、日本の上空を通過するときに迎撃するミサイルのボタンを押さなければ、日米同盟は壊れる、これもわかりきった話です。そういうことが起こっていないからいいですけれども、起こつたら大変なことです。

つまり、集団的自衛権問題で今、問題になつてているのはそのレベルの話です。同盟を結んでいる国であれば、誰がどう考えようと最低限やらなければいけないことを日本はやっていない。こういうことをしていると日米の共同作戦はできなくなつてしまふのではないか。

しかも、アメリカは今よたついてきています。財政の壁の話が随分マスコミを賑わせましたけれども、最大のカットをせざるを得ないのは軍事費でしょう。アメリカと

てスーパーパワーではなくなりてくる、片や同盟国の日本が集団的自衛権行使を容認しないという態度を崩さなければ、いつか日本の将来が保てるはずがない。

恐らく安倍さんはそのように考えているに違いないと思しますが、問題は厄介です。憲法改正——となるべく難しい問題です。衆参両院の三分の一を得なければならなくなるのは、ほとんど禁止的な条項ですから、弱つたものです。

やがて日本を前にして、ナレ、アーモドージ画氏は昨年の夏に以下とあるような報告を出しました。The US-Japan Alliance ANCHORING STABILITY IN ASIA, Aug. 2012です。ANCHORING STABILITY IN ASIAと書いてあります。が、ANCHORは錨^{じか}という意味ですかね、動詞形で錨^{じか}と錨^{じか}で船をつなぎとめるといふやうな意味でしょう。日米両国はアジアの安定のために日米同盟をつなぎとめようとする意味だと思ふます。

私の翻訳は余りいい翻訳ではないかもしれません、次のように書いてあります。一番目が前文のポイントになる部分です。二番目が一次、二次、三次と続いた報告書のコアの部分です。集団的自衛権行使せよ、といふことです。三番目はまと

めです。もっとたくさんの中文章ですが、私がエッセンスと思うところをピックアップしてきましたので、少し目を通してください。

「本報告は日米の同盟関係が漂流する中で作成された。両国の指導者は数多くの懸案を抱え、世界で最も重要な同盟の一つ、日米同盟の健全性と反映が危殆に瀕している。……日本は一流国たることを望むのか、それとも二流国に転じても不満はないのか。仮に日本国民と政府が二流国の地位に甘んじそれでいいというのなら、本報告は不要である。同盟に関するわれわれの評価は、日米両国が多大な貢献をなしうる国際社会において、日本が米国の完全なるパートナーとなりうるか否かにかかっている」——これが前書きです。

「集団的自衛権行使の禁止こそが、日米同盟にとっての障害である。東日本大震災時における米軍の救援活動は、米軍と自衛隊との共同行動がいかに高い能力を發揮しうるかを示した。日本政府に集団的自衛権の権限を持たしめることこそが、平和、緊張、危機、戦争に際して、米国が日本に全面協力して行動できる条件なのである」

「われわれは、日本が重大な岐路に立っていると認識している。戦略的に重要な時

期に際し、日本は自己満足に耽るのか、指導力を発揮すべきか、いざれかを選択しなければならない。日本には指導力を發揮する潜在力がある。アジア太平洋の全域で劇的な変化が起きている現状は、日本がこの地域の運命を切り開くための、実は、絶好の機会なのである。日本の指導者がリーダーシップを發揮すれば、日本は一流国としての地位、ならびに同盟関係における同等のパートナーとして必要な役割を演じることが間違いくでない——これはなかなかいい主張だと思います。

この三番目のパラグラフの真ん中、「アジア太平洋の全域で劇的な変化が起きている現状は、日本がこの地域の運命を切り開くための、実は、絶好の機会なのである」——これを言いたかったのではないでしようか。つまり、中国のことを言つてゐるわけです。中国問題を日本がどう対応するか、苦しいだろうけれどもこれを切り開くことが、日本がまともな国になるための絶好の機会なのだよ——これは中国人も読みますから、「中国」とは書いていません。こういう表現で言つていますが、私は非常に力強い文章だと思います。

「絶好の機会だ」という呼びかけに日本はどうやってこたえていくのでしょうか。ちょうど政権も変わりました。皆さん、この政権をどう評価するか、まだ実績が一カ

月余りですから評価のしようがないと言われるかもしませんけれども、過去三年半続いた外交不在、外交敗北のつけを取り戻すためだけにも相当のエネルギーを費やさなければならぬという不幸を背負っている。しかし、久方ぶりにしかるべき人物がしかるべきポジションについたのかという感覚だけは持っています。

第二部 渡辺先生と一問一答

日英同盟の陰に柴五郎の存在

（司会：平岩小枝教化委員）まず、本日の先生のお話を踏まえまして出された質問でございます。先程先生のお話の中で日英同盟を廃棄するに至った経緯をうかがいましたが、日英同盟を結ぶに至った経緯につきまして、薩英戦争・上海事変などの状態を見ていつて、英國側が日本を信頼に足る国だというように理解したという」とをアーネスト・サトウさんが書かれた本の中で読んだことがあるのでですが、「これにつきまして先生、日英同盟の時の英國が見た日本というものを、どのようにお考えですか？」

講師・渡辺利夫 いろいろな解釈は可能だろうと思いますけれど……ちょっと質問とは離れながら話をしますが、日英同盟を分断させる一番の勢力になつたのはアメリカです。そのアメリカとサンフランシスコ平和条約以降、日米は今度は同盟関係に入ります。パワー・ポリテイックスという言葉がありますけれども、パワーをどのよ

うに使うことがその国にとっての国益に繋がるかという力学です。で、国際関係を見なければならぬだらうと私は思います。昨日の敵は今日の友という言葉もありますが、今日の友は明日の敵かもしません。そういう力学というものを明治の指導者は常に——例えば福澤のような男は——そういうパワー・ポリティクス論なんて政治学はまだ当時無かつたはずなのに直感的にそういう連立方程式を自分の頭で解いていたのです。解いて、今はイギリスと結ぶべきだ今はアメリカ、と、そのように変転していったのだらうと思います。そうは言いますが司会者が今言つたように、やはり何か相手国が日本を信頼に足る国だと。日本は勿論イギリスを信頼するに足る国だというメンタリティが無ければ同盟は成立しない、ということも事実なのだろうと思います。この点で一番私は直接的なきっかけになつたのは義和団事変だらうと思います。

皆さんお若い方が多いからわからぬかもしませんけれども、昔ハリウッドの映画で「北京の55日」という映画があつたのをご存じの方がいらっしゃいますか？　当時先ほども言いましたように中国は列強から虫食いのようにやられていた国です。可哀相な国です。現代の中国人は屈辱の近代百年を歩んできた国だという自意識を

持つてゐるだらうと思つのですが、そういう自意識も中国人の立場にとつてみれば当然のことだらうと思います。当時の北京には今の紫禁城の中に十数カ国の公使団が住んでゐる地域があつたのですが、そこもおよそ数えることが出来ないくらいの反乱軍が押し寄せてくれるのです。これが義和団です。義和団の乱を横文字で言いますと「Boxer's Rebellion」と訳されます。「拳の反乱」です。ある拳法を用ひれば敵の矢が飛んどくよ、弾に当たらうと自分は絶対に死ぬことはないと言ふある種の神秘信仰です。こんな怖いものはないわけですが。それが当時北清と言っていた、満洲辺りでしょ。義和団事変のことと北清事変とも言へるのはその理由なのです。ありとあらゆる西洋の文物をぶつ壊して歩く集団がいたのです。これが北京の紫禁城に住む列国公使団居留地域を襲うのです。それは恐怖であつたに違ひない。もう風前の灯火といふところです。すぐ近くに日本があるわけですから日本の支援を仰がなきやならなどといふことになつて支援を依頼して日本も出かけることになるのですが、少なくとも日本が着くまでそこを守りきらなきやならじふつたときには、水際立つた行動を起こした男が柴五郎です。この人は福島、会津藩出身の公使館付きの軍部アタッシュ。軍から派遣されていた領事館にいた男です。この人が水際立つた戦略

と列国の人々の陣形を上手く立て替えてともかく耐えて耐えて耐え抜いて、日本軍が到着して義和団を追つ払うということになつたわけです。それを描いたハリウッド映画が「北京の55日」という映画でして。何故か柴五郎ではなくてチャールストンへストン演じるところのアメリカの将軍が、「ああよく五十五日俺たちは持ちこたえられたな」というシーンで終わるのですが、「そりやないよ」というのが僕の感覚でして。殆ど日本は出てこないので。だけど眞実は柴五郎の活躍なのです。それからその後到着した日本軍の活躍。この水際立つたという言葉を使いましたが、柴五郎のリーダーシップ。それから勇敢に戦つた日本軍の少數でありながら練度の高い姿をイギリス人がジーッと見ていて、「ああ、極東にこんな凄い侍の集団がいるんだなあ。さぞや立派な國なんだらうなあ」と考えたということなのです。これが日英同盟の発端だと言われています。

高橋是清という当時の財務大臣、名前を聞いたことがあるだらうと思います。あらう人の自伝を読んでみますと、日英同盟を結び、それから日露戦争に入るのですが、日露戦争に入つたものの、さつきも申し上げたようにあんなどでかい国と極東のこんな小さな島で戦争をやって勝てるわけがない。第一お金がないわけです。当時の

租税負担率は五割を超えていたのですから、国民は稗と粟しか食えないわけです。全部租税でとられてそれが艦船に化けている。それだけでは間に合わないと言うので外債、戦争のために外国に日本の債券を買ってもらう。その買ってもらうようにお願ひする係として横浜港を出発したのが高橋是清なのですが、どこへ行つたって全然売れないのであります。日本がロシアに勝てるなんて誰も思つてないわけです。苦心惨憺をするのです。その内に鳴緑江渡河作戦という有名な戦いがありますが、そこで日本が勝利した辺りから「ひよつとしたら万が一、あるいは千に一千くらいの確率で日本が勝てるかもしれない」と思い始めて、少しづつ売れ始めるのです。高橋是清はアメリカで殆ど売れなくて割腹自殺までしようと思つたらしいのですけれど、最後に救われるのです。

それが、その時またまイギリスにいたアメリカのユダヤ人協会のトップ、シフという人が、「俺が買つてやる」と予定していた額の半額を出してくれた。このとき話題になつたのが柴五郎の話なのです。で、「俺は柴五郎のことはよく知つてゐる」と。しかも、「あんな見事な侍はない」と。ああいう将軍を輩出した日本の武力集団、つまり軍部は立派なものだ。なんとか彼らに日露戦争を勝たせてやりたい。シフと

いう人はユダヤ人でした。当時ロシアの中でユダヤ人は非常に迫害を受けていたのです。シフはニューヨークにいたのですが、怒りを常に持っていたのだけれど、自分たちだけでは何もすることができない。勇猛果敢にもロシアに戦争を挑んでくれる極東の日本という国があった。あの柴五郎を生んだ日本なのだ。そういうつてお金を出してくれた。というヒストリーが高橋是清の自伝に出てきて、はつと息を飲まされた思いがありました。

それが全てだとは到底思いませんが、そういういくつかの信頼できるに足るという、薩英戦争の話を含めていくつかのエピソードはあります。だけでもそれは結果として勝利したが故に、多分にストーリー性・物語性をもつて創られたエピソードなのだろうと私は思います。そういうエピソードが眞実と言うよりは、パワー・ポリティックスの現実に目覚めている指導者が両方にいたということの方を徹底的に語らねばならない。エピソードはあくまでエピソードなのです。一方、パワー・ポリティックスは予見力が必要です。さきほど紹介した福澤諭吉の文章は日露戦争よりも十年近くも早く書かれている。そして日英同盟結ぶべしと言つている。

当時に比べて現在の方が軍事体系や民族関係など、遙かに錯綜しているのですか

ら、その条件をいくつかの連立方程式で解いていくような、そういう作業が僕は必要なのだろうと思います。もう一つ、ついでに言わせてください。今、尖閣は非常に厄介ですし、北朝鮮も厄介です。中台問題がどう転ぶか。これも非常に不透明です。この地域が次の時期のバルカンか、第一次世界大戦のような状況にならないと誰が言えましょくか。

東アジア共同体などという麗しい構想でもって語るような地域では全然無い。そう思つてはいる矢先にオバマ大統領が一期日の後半辺りからアフガニスタンやイラクから兵を引いて東アジアの方にピボット（旋回）している。オバマ政権はアジア最重視戦略を前面に打ちだしている。いかなアメリカのような強大な軍事力を持つた国でも一正面作戦はなかなかとりにくいで一方から兵を少しづつ引き、もう一方に重点を置いていく。これは日本にとって好ましいことだ、と多くの人は発言していますし、新聞にも書いてあります。僕もそう思います。しかし他方、イラクにせよ、アフガニスタンにせよ、それからアルジェリアで今度大事件が起きましたし、北アフリカも混沌としています。あれをよく「アラブの春」なんて言つたものです。どこが春なのでしょうか。

つまり、中東地域がバルカン化していく確率はかなり高いです。そこからアメリカがアジアの方に戦力をシフトして、もう一回こつちへ戻らねばならない。福澤諭吉になつた氣分で言えば、そういう可能性を十年後くらいに起こらないと誰が保証できますか。その場合、日本が集団的自衛権行使は保持できるけれど容認できず、などという対応を続けていたら、おそらく日本は滅亡なのだろうと思ひます。本格的に滅亡の時期がやつてくるというように思ひます。そういう国際環境・国際関係の力学というものを徹底して予見しうるような……さつき知的鍊磨という言葉を使いましたけれども、そういう指導者、あるいはそういうことだけを考えているエージェンシー、それが日本にはありません。

非常に単純な理屈を我々は鮮明に自覚しなければならないと思うのです。それはやつぱり日米同盟。日本に与えられている選択の中で今取り得るものは既にあるものを磨いていくことだと。と言うと必ず対米従属だとアメリカプードル論とか埒もないことを言う人がいっぱいいるのです。どうしてなのだろうかと怒りを込めて思つてゐるうちに歳を取つちゃいました。そういうことを考える学生を少しでも育てるいとしい努力をしているところなのです。

中国の本音を隠して相手を欺く 鞜晦戦略^{とうか}

〈司会〉 最近の尖閣諸島をめぐる中国のレーダー照射など非常に挑発的な動きについてどう思われますか？

渡辺 鞜晦戦略、要するに本心を隠して相手を欺いてしかるべき力を蓄えてしかるべき時に使おうと、こういう戦略を中国は長らくとつてきたのです。つまりこつそり軍事力を高めましょうという戦略です。一九八九年六月四日は北京天安門事件が起きた日です。あの時テレビで我々は凄い映像を見せられたのです。自由化と民主化を求める市民や学生が百万人です。天安門広場、世界で一番広い広場を埋め尽くすのです。党や政府の幹部は震え上がったでしょう。百万人のデモに囲まれた状態を想像してみたら、先の紫禁城が義和団の乱に囲まれた気分だったのではないか。その恐怖にうち震えたのでしょうか。当時の最高権力者である鄧小平が、「あいつらは反革命暴乱の徒だ」と決めつけるわけです。最後には人民解放軍の出動を要請して、座っている学生を人民解放軍の戦車でひき殺していくという出来事が起こつたのです。

死者の数は公表されてますけど、そんなの全然あてにならない。これがテレビに映つちやつたのです。どうして映つたかというのは不思議な話なのですけれども、私はあの時、一日中……一日くらい動けずに家のテレビの前で釘付けになつております。

ロシアでゴルバチョフ政権が生まれ、中ソ和解をしようと言つてゴルバチョフが北京の空港に降り立つた日がその日なのです。中ソ和解というビッグニュースですから、世界中のジャーナリストがみんな集まつてきたのです。その日の前で出来事が起つたから一挙に世界に放映された。そのショッキングなシーンも世界のお茶の間に飛び込んだ。見た殆どのはこんなひどい国があるか。とんでもない国だということで一挙に対中制裁に入るわけです。貿易の取引は止める、当時、改革開放が進んでいた時期ですから外国企業、日系企業を中心に相当中國に出ていたのですが、潮が引く如く帰つてくる。ODAはストップする。まあミサイルを撃ち込むわけにはいきませんけれども、経済的に可能なありとあらゆる制裁をとつた。そのことによつて中国は経済も停滞するわけです。この実情を眺めて、こんなに中国が世界中からたたきのめされる、制裁まで受けるのは何故なのだと。結局自分の国に国力がないからだ。軍事力がないからだ。そう認識するわけです。さすがにすごい愛国的権力者です。

そこからいよいよ軍事力を拡大していくといつて、現在に至るまでの毎年の軍事費の伸び率は二ケタを記録します。ところが、これは堂々とやるわけにはいかないのです。それだけ外国から叩かれたのに堂々と軍事費の増大をやるわけにはいかない。そこで**韜晦戦略**つまり包み隠しひそひそやろうと。人の目をくらましてこつそりと人の目にわからぬよう軍事費を増大していくといふやり方をとってきたのです。だから世界の国々は、中国がそれほどまでに軍事費増大と軍事の近代化をやっているとはあまりよく知らなかつたのです。見えないようにやつてきた。ところがもうこれだけ軍事費が増大し軍事の質も近代化されてきたのであれば、寧ろこれをギラギラと見せつけた方が中国の国益の拡大に資すると判断したのが、二、四年の話なのだろうと思います。従つて南シナ海は中国の核心的利益の場であつて、領有については他国がつべこべいべき場ではない。尖閣を中心とした東シナ海も中国の核心的利益の場であつて、他の国が文句を言う筋合いは無い。そういうことになつてきて挑発的な行動を取るようになつてきた。それによつて中国の国益が増すと考えるようになつたからです。

ただちよつと誤解を恐れぬように、付言させていただきますと、中国は本格的に

尖閣で事を構えるか、と質問されたのであれば、さてどうかなと思います。中国の国内を多少なりとも勉強している私から申し上げるならば、あれほど厄介な問題を山のように抱えている国は他には無いと思えるくらいの矛盾と相剋の山なのです。所得分配の不平等、環境劣化の問題、少数民族問題、その他もの凄い厄介ないずれも克服不可能ではないかと思えるような問題をたくさん持っている。それが対外的な膨張と言いますか、軍事的な衝突などを外でも起こして「万が一」にも負ける、負けないまでもパリティ（同等）にまで持ち込まれたことがわかつたら、ネット社会ですから全国にあつという間にその情報が知られてしまつて、ひょっとしたら明日にも政権がぶつ倒れるかもしれない。そういうリスクをあの国は持つてゐるのです。だとするとそんな冒険をできるかどうか。するかといったら、そう簡単ではないだろうと思つています。

では、そこで話が終わりかというと、だからこそ今のような圧力を、ひょとすれば戦争になりかねないギリギリの圧力をおそらくは五年とか十年十五年二十年というようなスパンで中国、あの合理的集団はかけ続けるのではないでしょうか。私はそう思います。さつかもちよつと言いましたけれど、そういう圧力に日本が耐えられ

なくなるかもしれない。そして何か失点をするのではないかということを中国は待つているのだろうと思います。尖閣で事を起こしたとしても日本の自衛隊の質、すなわち練度、軍事力は相当精強なもので、中国の人民解放軍が簡単に尖閣諸島を領有、上陸できるものではないと思います。不安定さは残りますが、尖閣は日米同盟の対象地域だとアメリカの国務長官がはつきり言つているわけです。この信頼をもしアメリカが裏切つたということになると東南アジアで対米不振のドミノ現象が起こっていくわけです。アメリカはあてにならない国だと。韓国でも起こるかもしない、フィリピンでも台湾でも起こるかもしない。そんなことをしたらアメリカのアジアにおける影響力は一気に沈んでしまう。そうするとやはり尖閣についてアメリカは本気かもしれないと中国が思つていれば、そう簡単に事を起こすわけにはいかないと思います。この隠然たる長期に渡つて掛けて来るであろう圧力に日本が耐えられなくなつて、尖閣は日中共同管理でいきましょう、とか尖閣に関心ある国で集まつて数カ国のフォーラムを作りましょう、とかですね、現にそんなことを言い出している人が日本の中にはいっぱいいます。そういう意見が出てくることを中国は待つてゐるのです。それは見事な戦略家集団です。

もう一つだけ言わせて下さい。中国にみなさん行かれることが多かろうと思うのです。この十年間くらいに何度も行かれた方も多いと思いますけれども、行く度にずいぶんと変わっていますよ、あの国は。今まで無かつたような店が出来たり、人々が着ている服もずいぶんと華やかになり、ポップスなんかを見ても日本とどこが違うのかと思うほどです。この間、上海に行つた学生が帰つてきて何を言つたかというと「上海の方が凄いじゃん」というようなことを言つてます。そんな感覚に襲われるくらい中国は変わっています。価値観も多様化している。そういう中にあって唯一と言つて良いくらい変わらない、そしてその相対的比重が大きくなっているのが軍部です。この力は抗いがたいほど強くなつていくだろうと私は見込んでおります。

今度、習近平・李克強という新しい体制が生まれました。の人たちは革命第五世代です。みんな戦争をやつたこともないし革命戦争を闘つたこともない人たちです。文民なのです。毛沢東とか鄧小平は軍人です。軍歴もあるし軍功もあるしカリスマ的な力もあつたのですが、後の江沢民・胡錦濤それから習近平はみんな文民なのです。権力基盤は弱い。さつき言つたように価値観の多様化した中国の中で人々はバラバラのことを考えていますし、共産主義なんて誰も信用していない。その

中にあつて強い権力を握るために何が必要かと言ふと、やはり軍部の支持を得ることです。ということは軍部にたくさん譲歩をするということです。そのためには軍事費はどんどん増加していく。こういうメカニズムが働いているのです。それはもう鮮やかなものです。

例えば、中国のパワー・エリートというのは誰かと言ふと、党の政治局中央委員です。このトップが総書記。それからチャイナセブンと言われている七人の党常務委員。これがパワー・エリートの中のパワー・エリート。そこに二百何十人かの中国共産党政治局中央委員がいます。この間、大学院の大学生と中国の留学生を含めて、この人たちのバックはどういう出身母体から来ているか、特に軍部出身は何人いるか。外交部から何人いるか勘定してくれと言つて、一緒にやつたのです。なんと四十人。大変な数です。グレーゾーンを含めるともつとも多いかもしません。ついでながら申し上げますと外務省(外交部)は三人しかいません。尖閣問題を巡つて外務省と向こうの外交部で話し合いで解決しろなんて言つたつて何の権力もないとたった三人なわけで、話にならないということは見えています。軍部の増大が、中国が海に向かつて放射している力の一番根っこにある。そういう見立てで中国を見る必要があると思いつつ、

更に勉強してみようと思つております。話し合いで方かたがつくというような隣人関係、是非そうあつて欲しいという希望はありますけど、現実はそう簡単ではないと思うのです。結局そういうことをやる中国がおかしい理不尽だと言つたところでしようがない。自分たちの方でしかるべき戦略を立てる必要があります。

さつき報告の中で日本は今非常に苦境の中に置かれているが、よく考えてみるとこれは絶好の機会なのだと、という指摘がありました。アメリカのお二人はそのように日本を見ている。私も大体そういう感覚がよくわかるなどいうような感じ方を持っているのですけれど。

TPP参加YESによるそれぞれの思惑

(司会) TPP参加の是非についていかがお考えかと。

渡辺 YESかNOかと、もし問われるなら今まで私がやつてきただとかからしてNOというわけにはいかないのでYES。けれども非常に率直に言うとそんな簡単に

YESかNOかを突きつけるなよ、というのが私の素直な気持ちです。現代の日本を見ていて日本の本当の危機はどこにあるかというと、ありとあらゆる階層で断裂、分裂が起こってきていることにあると思うのです。中央と地方とか製造業と農業とかです。或いは被災地と非被災地とか、派遣社員と非派遣社員とか。いろいろなカテゴリーで、かつて一体性を持っていた日本がバラバラと崩れ去っていく様さま、これが日本の危機の一番根っこのあるのではないのかなと思います。

私どもはもうすぐ二年が経とうとしている震災の時に、東北に住んでいる人々が、見ていて涙がこぼれるくらい我が身を省みず他者を助けるという利他的な行動をとられたことを覚えています。このことはおよそ考えられない欧米やアジアの人々から絶賛を浴びました。同じ同胞としても、被災者の立ち居振る舞いの中に、「やっぱり日本人は…、」と嬉しく感じることが少なからずありました。しかし何故あれを嬉しいと思つたかというと、自分たちがそうではなくなつたという自意識が反映されています。僕たちはあんな行動が取れるかしら。私は都内のあるマンションに住んでいるのですが、地震が起ころう度に「この辺でやられたら孤独に死んでいく他しかたがないのかな」と思つたりすることがあります。四十軒ぐらい

のマンションですけれど、「おはようございます」と言つても答えるのは三人に一人くらいです。というようにおよそ共同体の中ではあり得なかつた立ち居振る舞いが見られます。一日家を出て帰るまでの間に、そういうことで嫌だなと思うような感じが一度二度はある。こういうところに本当の危機の源があるのでないかなとおもつております。

宮本常一という人類学者の『忘れられた日本人』という名著があつて、まだこれは岩波文庫で売られていると思うのですが、対馬の北西部にある小さな村に住んでその村の習俗と言うが、伝統や文化と言えば切り落とされてしまいそうなもつとささやかな人々の細やかな立ち居振る舞いを精細に描写しているエッセイコレクションがありますが、「ああ、こんな感じだつたのだな」と少年時代を思い出しながら読みました。宮本常一がこの本を書いたのは昭和三十八年のことだつたと思うのです。実は日本が圧倒的に変化していくのはその後なのです。翌年にオリンピックが開かれます。アジア太平洋のベルト地域に向けて農山村から人々が怒濤の如くその地域に集まつてくる。農山村では過疎化が起こつていて、今度震災でわかつたように残つているのは老人ばかりです。共同体なんて言えないような状態があちらこちらに出てきて

いると思います。

くどいようですがそういうコミュニティ・共同体の崩壊、或いは人々の共同体意識の喪失、こういったものが危機の一一番深いところにあると僕は思っているのです。何でその事がＴＰＰと関係があるのか、とお思いかもしませんが、私はあると思っていります。つまりこの断裂的分裂的な今の日本というものを更に分裂させるのではないかという気持ちが拭えないのです。じゃあ何故賛成なのかと言われると答えに窮するかもしれません、私はこういう高度に政治的な判断をなんで国民に突きつけるのかと思います。製造業は大賛成、農協が大反対というのはわかりきつている話なのです。こういうことは、かつてであれば専門的な役所が考え抜いて、こういう結論だということで国民を説得していくというのが妥当なやり方だと思うのです。考えてているのは利益団体だけであって、専門的な意味での思考が深いとは思えない。それではまとまる議論もまとまらないと思います。もっと大きなテーマ……ＧＡＴＴに加盟するだと遙かに大きな問題の時、国民はこんなに騒がなかつたです。もつとしかるべきところが考え抜いてこれしか答えがないのでこれで行きましょう。ではこれで国民を説得しましょうと。勿論利益団体があつていろいろと大変でしょうけ

れども決めるることは決める。そのうえで日本は民主主義国ですから選挙で民意を問うことは必ず出来るわけです。それを今回はやつてないと思います。

その他日本を国難だと騒がせている原発の問題、エネルギーの問題、安全保障の問題、TPPの問題などいくつかあるわけですが、こういったものを民意で問うというやり方は皆さん正しいと思いますか。僕はそれが民主主義だとは考えない。民主主義はそんな麗しいものではないです。民主主義で失敗するケースはいくらでもあるのではないでしょうか。やはりそのために官僚という選挙ではなくて能力によって選んだグループがあるのであって、そこで徹底的に考え方抜く。そして考え方抜いたものをもつて政治家に託し、政治家が国民を説得できるものは成立させる。ということであれば、僕はこの社会が成り立つとは思えません。原発を国民投票するなんて言いうのは実に愚かな選択です。今、それまがいのことをやつているのではないですか。それを民主主義というなら一種類毎に全部国民投票にかけて決めていけば政府も政治家も要らないということになるわけです。そうではないと思います。私たちは政治家を選ぶ場合にはある理念、大きな意味での国の形はこうだとか、この国の形を短期的、中期的或いは長期的に私はこう実現したい、そういう思想理念を持つている人

物を選ぶのです。その人物に政治を託すわけです。それが僕は民主主義だと思つております。TPPを国論に投げかけて賛成か反対かといつたら必ずバトルになります。だつて農協はそうなつたら壊れるし、製造業はそれが無かつたら競争力が成り立たない。これはもう妥協のない戦いになつてしまふ。民主主義に対するあまりにもナイーブな楽観主義です。これはどこかで克服しなければならない。そういう議論がアカデミズムにおいても論壇においてもなさ過ぎる。民主主義は時に、といふよりもしばしば間違える、狂うことがあると構えておく必要があると思つております。

震災復興へ 共同体再生の道のり

（司会）最後に、先生は確かに震災は国難で、天災でもありますが、また日本の転機の一つになるかもしないという」とを「著書の中で書かれておりましたが、私たち神職は、共同体の一つのシンボルである神社というものを守つておられるわけです。先生が今お話をされた中の、断裂されているその共同体の再生こそが必要という点について最後にお願いします。

渡辺 僕はそんなに多くの国を知つてゐるわけではないのですが、今までの体験から

言つて日本ほどこんなに短い間に砂のよくな社会になつてしまつた国は少ないと思います。私という一人の人物が物心ついて今日に至るまでの期間というのは半世紀とちよつとぐらいです。この間非常に穏やかで深々としていた人間関係があつといつ間に崩れた、そういう感覚を持つてゐるのです。東日本大震災があらわにしたものの中でも私が一番象徴的に思つたのは、微かではあれそこに共同体といわれるものの原形が残つていた、その事を発見できただときの誇らしいような気分なのです。ということは、私の周辺からはそのようなことが無くなつてしまつていたという事実の反映だと思ひます。これを失つてこの社会にどれ程の価値があるかというようになります。

私が一番残念だな醜悪だなと思つてゐるものは瓦礫の公益処理があんなに難渋していることです。なんでここまで日本人というのはエゴイステイックな存在になつてしまつたのか。かつての日本人であれば——これは想像でしかありませんが——あんなに苦しんでいる人がいるのだから、その苦しみを少しでも自分も引き受けなければならぬのではないかと、利己的と利他的を分けたならば利己主義が強い分だけ利他主義もまた強いという相関関係があつたような気がするのですが、今はエゴイズムのみが突出して多くなつて來ているのではないかと思うのです。もし自分たちがあの目

に遭つたらやはり他に助けを求めるだろう。そうした人の情にまで想像が及ばない。結局放射能がやだと言つて拒否する。他の被災県をたまにWebで開いて見るのですけれど、まだまだ自治体の中で受け入れるという市町村はきわめて少ないようです。自分が厄介な日に遭つたときは他に助けてもらいたいというのが人情だけれども、他人の被害は引き受けたくない。こんな日本が今まであつたかしらという感じを持つてゐるわけです。共同体の再生というと、あまりに大きな言葉になってしまいますが、もつともつと断裂的でない、人間関係のもう少し密度の濃いネットワークが社会のあちこちで生まれてくる、そのことを自覚的にやっていくことが必要です。日本の共同体と言うのはもう消えて遙かに遠い物になってしまったということが必要です。て、その自覚の上に立つて、もう一度ネットワークづくりを始めよう。そうしなければ我が国はどうしようもなくなります。

この間ある統計を見て慄然としたのですけれども、単身者世帯の激増です。標準世帯と言うのは夫婦と子どもからなる世帯を標準世帯というのですが、今単身世帯の方が標準世帯よりも多いのです。だから言葉を間違えています。単身世帯が標準世帯化している。厚労省の人口問題研究所の推計値が出ているのですが、二〇

三〇年には全世帯の三六パーセントが単身世帯化すると書かれています。つまり単身世帯というのは子どもを再生産するメカニズムを社会から奪っていくということです。父母、祖父母、曾祖父母、祖先がいて、その中に自分がいて、子どもがいて孫がいて曾孫がいて玄孫がいる。過去から現在へ繋がる連綿たる生命現象を大事な物と考えるという想念が日本人からあらかた失われている。この辺で再生しないともう間に合わないと思います。継承していくものが無くなってしまう。そういう気分も拭えないです。

日本人は生命至上主義ではない。個体生命主義だと最近出版した本で書き直しましたのです。祖先があつて私があり、私があつてまた次に向かう世代が再生産されていく。その全体を生命と言うのだろうと思うのです。どうも日本人は、そんな生命などという立派なものではない、もつと個体生命主義だと。自分が幸せであればそれで良い、という個体生命主義に堕落していると思います。

神社というものが何か。私は解説すべき問題ではなくて、そこにあるべきものとしか命名できないものではないかと思います。共同体とか民族とか国家とかいうものをそのように表現すべきものだと思うのです。私はもうそのようにすり込まれて

生きてきたわけですが、今後生まれてくる日本人に取つてみると必ずしもそういう存在として意識されなくなることを恐れます。神社は神道という文化と伝統が根付いているところではあります、同時にそこに人々が集つて、いわばインターフェースの大きな場を作るという大きな役割を持つていると思います。共同体再生といった場合、神社側もそういうた働き掛けをしていくこともあろうかと思います。上手く解説は出来ませんけれども、何か日本人が個体に分化しつつあるという認識を先ず持つ。このことが日本の将来を危うくするんだというような認識に高める。そこから全て動き出すというように私は思います。